

不思議6 再建その4

寛永14年(1637年)に建立された現本殿は、三間社流造(さんげんしゃながれづくり)という形式の建物です。前面が三間(約5・4m)あって、屋根がスキージャンプ台のようになった建物です。銀子請取拂帳という古文書には、建築に銀八貫五百九十六匁(もんめ)二分(ぶ)を要し、2236人の大工がかかわったことが記されています。当時の平均貨幣価値を円に換算すると約千六百万円となります。現在の貨幣価値に直せばいくらになるのでしょうか。

臺股と呼ばれる箇所には鸞(らん)、九尾狐、獬豸(かいち)、龍、虎、獅子が彫られています。これらの動物は古代中国の想像上の霊獣です。虎や獅子(ライオン)もまた龍と同格の霊獣とされています。鸞は鳳凰に似た青色っぽい鳥で鳳凰から生まれ、平安な治世に姿を現すといわれます。九尾狐は漢王室の守り神。獬豸は優れた裁判官が生まれると姿を現す一角の羊で、悪人を角で突くのだそうです。龍は皇帝のシンボル、虎や獅子は悪魔を圧する霊力があるとされています。

これらの瑞獣が彫られた理由として考えられるのは、井上内親王を守護すること。そして、この本殿が建立されるまでの時代は戦乱の世が続き、御霊神社も数度、兵火にかかっていることから、これ以上兵乱のない平和な世の中であってほしいという願いが込められているように思われます。